令和５年度　光市立塩田小学校　研究概要

Ⅰ　本年度の研究について

１　研究主題

自ら考え、表現し、学び合う児童の育成
～ステップ学習・リーダー学習をとおして～

本校では、「学校でも地域でもきらきら輝く塩田っ子の育成～自主・自律～」を教育目標に掲げ、めざす児童像である「㋓自分から考え、表現し、学び合う子」「㋔思いやりとふるさとを愛する心をもつ子」「㋕たくましく、明るく、元気に生活する子」の育成に向けて、学校運営並びに教育活動を行っている。

昨年度、本校では、「言語力を高める授業の在り方～相手意識や目的意識をもち、正確に伝える力～」を研究主題とし、児童の言語力を高めるために、児童が話し合う必然性のある課題を設定することや、目的や意図に合わせて表現できるようにすることや、ＩＣＴ機器を効果的に活用することについて工夫・改善をしてきた。課題のもたせ方を工夫することで、自分の考えを進んで説明する姿が見られるようになった。さらに相手意識や目的意識をもって人と関わり、様々な考えに触れたり自分の考えを表現する力を高めるように取り組んだりしたことで、児童の学びに向かう意欲の向上を図ることができた。

一方、児童が自ら問題を見出したり、課題を設定したり、それらの解決に向け見通しをもって取り組んだりする点や、主体的に話し合い、自ら学習を進めるという点において課題が残った。要因としては、児童自らが学習を進めていく機会を十分に保障していなかったことに加え、複式授業における自律的な学習についての教員の指導経験の不足が考えられた。

そこで、本年度は研究主題を「自ら考え、表現し、学び合う児童の育成」とし、自律的な複式学習（リーダー学習）を中心に授業研修を行っていくこととした。

２　研究の視点

児童の自律的な複式学習を推進していく取組として次の３点に取り組むこととした。

①ステップ・リーダー学習についての共通理解
②ステップ・リーダー学習の手法を用いた授業研究
③ステップ・リーダー学習に必要なガイドブックの作成や環境づくり
④ステップ・リーダー学習を支える支持的風土のある学級づくり

※③④は、①②を支える環境や基盤づくりの取組であるため、次項では割愛し、特に①②についてその実践を述べる。

Ⅱ　研究の実際

１　ステップ・リーダー学習についての共通理解

（１）教員間の共通理解

年度当初に岩国市立錦清流小学校の片山博登教頭先生を招聘し、ステップ・リーダー学習の研修を行った。自律的な複式学習（リーダー学習）を成立するためには、個で学ぶ場や集団で学ぶ場等の学習段階が明確であり、学習計画が指導者と学習者が共通理解していることが必要である。そこで、片山先生の提唱される「ステップ学習」について全教員で学んだ。

ステップ学習には、「であいタイム」「ふかめタイム」「ひろめタイム」「まとめタイム」の４つの段階がある。ステップ学習の導入期の本校としては、それぞれの段階を次

のように捉えた。

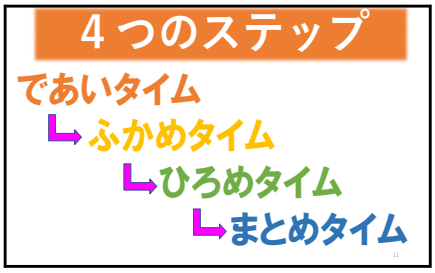
段階	目的
であいタイム	学習者がめあてや課題、課題解決の手かがり等の見通しをもつ。
ふかめタイム	学習者個人が、課題解決の手かがりをもとに、課題に取り組み、自分の考えをもつ。
ひろめタイム	学習者同士で、考えを伝え合ったり、話し合ったりして、それぞれの考えを広げたり、さらに深めたりする。
まとめタイム	学習者がめあてや課題、全体でのまとめに照らして、当該時間に学んだことを振り返る。

そして、これらの学習段階を学習者自身が自覚しながら、リーダーを中心に展開していく学習を、当面の本校の「ステップ・リーダー学習」と捉えた。

（２）児童との共通理解

ステップ・リーダー学習を成立させるためには、上記のことを指導者と学習者が共通理解していることが不可欠である。そこで、全校朝会の時間を活用して、研修主任によるステップ・リーダー学習の全校児童へのガイダンスを行った。

ガイダンスの中では「ステップ・リーダー学習を行うことのよさ」「４つのステップの目的」に加え、「ステップ・リーダー学習の手引きの活用」「ひろめタイムでのリーダーの進め方のポイント」「まとめタイムでの振り返りの視点」について伝えた。発達の段階によっては、抽象的で難解な内容となるが、どの児童も自分に関わりのあることとして、真剣に聞くことができた。



２　ステップ・リーダー学習の手法を用いた授業研究

【研究授業①：５年算数科「図を使って考えよう」・６年算数科「表を使って考えよう」】

特に５年生の学習について述べる。５年生は児童が置換の考え方を理解して活用することが目標であった。しかし、実際の授業では、自分たちで活用するまでには至らず、活動が停滞してしまう部分が見られた。

「であいタイム」では、活動の流れを確認したり、「同じところに目を付けること」に意識できるように支援したりしたが、直接指導をさらに充実させる必要があったようである。例えば、題意に合う図を選ばせ、選んだ理由を説明させることで、置換の考え方をしっかりとつかませる等の支援を行うことも考えられる。題意や学習課題を確実につかむことで、次の活動でも「やれそうだ」「私たちにできるかもしれない」といった安心感や期待感をもたせ、活動が停滞することなく、自分たちで学習を進めることができたのではないかと考える。

「ふかめタイム」では、学習支援アプリを使ったデジタルヒントカードを提示し、児童の自力解決を促したが、置換の考え方の確認が足りなかったため、かなりの時間を要することになった。時間の設定をし、それまでに自力解決できなくても、「ひろめタイム」で、仲間と一緒に解決することもできるというように、教員も児童もステップを柔軟に考え、切り替えていくことも大切であることを感じた。

【研究授業②：３年算数科「式と計算」・４年算数科「図を使って考えよう」】

特に４年生について述べる。自分たちで学習を進めることに自信がもてなかった４年生には学習の流れを示したステップボードを提示して学習の見通しをもてるようにすることを継続的に行ってきた。本時では、「であいタイム」でステップボードを示すとともに、教員とともに本時の問題文を読んで前時との差異等を問うた上で、児童同士で話し合わせることで、自分たちでめあてを立て、見通しをもって学習に取り組むことができた。

本時の学習内容は、児童によっては自力解決が難しいことが予想されたため、「ふかめタイム」と「ひろめタイム」を往還しながら行う「ふかめ・ひろめタイム」を設定した。また、問題文の数量関係を図にまとめることに困難さが予想されたため、絵や言葉を操作できるデジタルヒントカードを利用できるようにしておいた。児童は、問題文を何度も読んだり、タブレットPC上で図での表し方を試行錯誤したり、仲間と意見を交わしたりしながら、課題解決にあたり、全員が問題を解くことができた。自律的な学習を促すためには、明確な見通しをもたせることや、自分たちで試行錯誤できるツールをもたせることの大切さを感じた。また、今回のように、自力解決の困難さが予想される学習内容では、「であいタイム」で例題を教員と一緒に解き、本時の内容理解にとって重要な考え方を理解させた上で、見通しをもって適用題に臨めるようにすることも一つの方法であることを講師の助言から学ぶことができた。

【その他の研究授業】

上記、研究授業①②の他に、１・２年学級における生活科「おいもありがとうはいふかいしよう」と特別支援学級における6年算数「およその形とおおきさ」の研究授業を実施した。ステップ・リーダー学習の形式はとっていないが、これらの授業からも子どもが自分から考え、表現し、学び合う姿や、それを導くための指導・支援について多くの知見を得ることができた。

Ⅲ　本年度の取組を振り返って

１　ステップ・リーダー学習についての共通理解

年度当初の教職員を対象にしたステップ・リーダー学習の考え方の研修、夏季休業明けの全校児童を対象にしたステップ・リーダー学習のガイダンスは大変効果的であった。全教員

と、学びの主体者である児童とが。同じ方向性をもって授業づくりに取り組むことで、教員同士、教員と児童とで授業づくりについて考えることができた。また、研究授業以外の場でも、教員と児童が互いの学級を訪れて、互いのステップ・リーダー学習のようすを参観するという自主的な取組にもつながった。

今後、ステップ・リーダー学習の互見授業をとおして、教員と児童が互いの学級のよさを見付けたり、自分の学級に取り入れたいことを見付けたりする機会に発展することを期待したい。

２　ステップ・リーダー学習の手法を用いた授業研究

ステップ・リーダー学習をスタンダードとして、実践を積み重ねてきたことで、児童は自分たちで学習を進めていくことに慣れてきた。他校との合同学習においても、自分たちで学習を進める姿も見られたことから、着実に自律的に学ぶ力を身に付けてきたことが分かる。また、ステップ・リーダー学習の「であいタイム」で、本時の学習の流れや課題をしっかりと確認することができたときには、児童の自律的に学ぶ力が一層発揮しやすくなることも見えてきた。

一方、発達の段階に即したステップ・リーダー学習の在り方や、「ひろめタイム」での児童による話合いの深め方や、支援の仕方等が課題として挙がった。今年度はステップ・リーダー学習の研修体制を整えるのに時間を要したため、導入が遅くなり、実践研究の期間が短くなった。このことも踏まえ、来年度もステップ・リーダー学習を継続するとともに、国語・算数だけでなく他教科等でも実践を積み重ねていきたい。

３　ステップ・リーダー学習に必要なガイドブックの作成や環境づくり

夏季休業中の研修でステップ・リーダー学習のガイドブックを作成したことは、９月からの導入期に大いに役立った。その後も、慣れない児童にとって、ガイドブックは補助的な役割を果たしたようである。

しかし、児童がこのガイドブックの内容にこだわりすぎることもあった。学年が上がるにつれて、ガイドブックの内容を越えて、学習を展開していくことを奨励するとともに、ガイドブックを児童と共に見直し、更新していくことが大切であると考える。今後も児童の自律的に学ぶ力がより発揮しやすい環境づくりに努めていきたい。

４　ステップ・リーダー学習を支える支持的風土のある学級づくり

「まとめタイム」における異学年での交流は、それぞれが学んだことをよさを感得するという面でも効果的であった。教員が積極的に価値付けていくことはもちろんのこと、児童相互で価値付け合うことが、学級全体の肯定感を高め、児童による自律的な学びを充実させてことが分かった。

今後、フリートーク等の対話活動を日常的に取り入れていくことで、学び合いの基盤となる支持的風土を一層醸成していくことにつながるのではないかと考える。

Ⅳ　終わりに

本年度の授業研究においては、山陽小野田市立有帆小学校の池上雅代校長先生にご指導いただいた。その中で「自律的な複式学習は最先端の授業である」という言葉をいただいた。ステップ・リーダー学習は、中教審答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」に示される「個別最適な学びと、協働的な学びの実現」にもつながるものである。「塩田小学校の児童は今、最先端の授業を極めているのだ」という自負をもって、来年度に臨みたい。そして、令和７年度４月に新設される光市立大和小学校に進む児童にとって、身に付けた「自律的に学ぶ力」が大きな強みとなるようにしていきたい。